

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770135

研究課題名(和文)『名公妙選陸放翁詩集』の編集と流伝についての基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research about compilation and circulation of "Minggong miaoxuan Lu Fangweng shiji"

研究代表者

甲斐 雄一 (KAI, Yuichi)

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：10637929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、元代に編まれた南宋・陸游詩の選集(アンソロジー)である『名公妙選陸放翁詩集』の諸版本について調査し、日本にのみ現存する元刊本・五山版が宋から明にかけての陸游受容において大きな役割を果たしていたことを明らかにした。『名公妙選陸放翁詩集』の本文は、陸游自身による推敲の過程を保存している可能性があり、かつ当時の読者に最も読まれた本文であった。また元々の詩の一部を切り取って絶句のような短詩として収録している例があるように、該書は14世紀において陸游という士大夫の詩が非士大夫層を含んだであろう読者による受容の一端を表しているのである。

研究成果の概要(英文)："Minggong miaoxuan Lu Fangweng shiji" is an anthology of Lu You's poetry that was compiled in the Yuan dynasty. This research deals with multiple commentaries on this anthology and through this investigation it becomes clear that the Yuan dynasty edition and the Gozan edition are the most authoritative among readers of Lu You's poetry in the Song and Ming period. This book could reflect the process of Lu You's elaboration, and the acceptance of elite literati poetry among more general readers.

研究分野：中国文学

キーワード：出版文化 本文批判 域外漢籍

1. 研究開始当初の背景

中国史において、唐(618-907)から宋(960-1279)への王朝交代時に中世から近世への移行が起こったとする、いわゆる「唐宋変革」説は、文学研究においても主要なテーマである。これを承ける形で、近世における文学がどのように発展し、近代へとつながっていったのかという問題が、近年宋代文学研究、とりわけ南宋(1127-1279)文学研究において着目されている。

具体的に言えば、南宋期に文学の創作主体の通俗化・二層化現象が確認されること、すなわち宋代でも南宋期こそが近世を強く体現する時代であるという認識が、既に研究者の間で共通のものとなっている。

本研究課題が主たる対象とする陸游(1125-1210)は、創作主体の二層化現象においては官僚文人・体制内の層に属する詩人として位置づけられる。しかし、文学のみならずあらゆる芸術創作は、創作主体のみにて完結するものではなく、そこには必ず鑑賞者、文学に即して言えば読者が存在する。

申請者はこれまで陸游の詩集『劔南詩稿』の自身による出版刊行について、官僚文人・士大夫層に限定してではあるが、彼の詩の読者である同時代人による評価と詩人に付与され形成されたイメージとの関連について検討してきた。

これを踏まえて、陸游の詩が誰に、どのようなテキストでどう読まれたのかについて、受容者である読者を非士大夫層にまで拡大して検討することで、官僚文人・士大夫層と非士大夫層が創作主体と受容者として交流し混濁していく実態を明らかにし、宋代以降の文学が近世化する過程をより詳密に位置づけることを目指して本研究課題は設定された。

2. 研究の目的

具体的には、本研究は元代(1271-1368)に出版された選集『名公妙選陸放翁詩集』(以下、『陸放翁詩集』と略称)について基礎的な調査を行うものである。調査の対象は主に以下の二つである。

(1) 元代に編まれた陸游の選集である『陸放翁詩集』。陸游が逝去して約1世紀後に編まれた、現存するものとしては最も早い陸游詩の選集で、前集十巻を羅椅(1214-?)が、後集八巻を劉辰翁(1232-97)が担当している。これには元刊本、五山版、そして明刊本が現存している。

(2) 『陸放翁詩集』に対する江戸時代後期の文人・村瀬栲亭(1744-1819)による増補版『増続陸放翁詩選』。これは中国の陸游詩受容を承けた日本における受容として注目されるものであり、長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』第16輯(汲古書院、1976年)に影印が収められている。

以上を対象に、陸游詩がどのように受容されたのかについて、二つの方面から検討を加えたい。

(1) 選出された陸游の作品を、彼の全集である『劔南詩稿』85巻本及び同時期の唐宋絶句集である『瀛奎律髓』に選出される陸游詩と比較し検討することで、該書の編集過程・方針について、とりわけ該書に基づいたであろう陸游詩のテキストについて明らかにする。

(2) 現存する版本調査から、中国はもちろん日本・朝鮮を含む漢字文化圏における陸游詩の流伝状況について明らかにする。具体的には、該書に対する江戸期の文人・村瀬栲亭による増補について、やはり編集過程・方針を中心に調査を加え、彼が拠った陸游詩のテキストを明らかにし、日本人による陸游詩受容の実態について考察する。

3. 研究の方法

『陸放翁詩集』諸テキストの校勘作業を行った。元刊本(国立歴史民俗博物館〔千葉県佐倉市〕所蔵)及び五山版(学校法人大阪青山学園所蔵)の目録調査を基に、以下の2つの角度から校勘作業を進めた。

(1) 『陸放翁詩集』元刊本系統と明刊本系統の校勘。現在、『名公妙選陸放翁詩集』の最も通行しているテキストは、『四部叢刊』に収められる明刊本の影印本と『和刻本漢詩集成』第16輯影印の京都田中庄兵衛印本(承応2年、1653)であろう。この2種を比較してみると、前者では前集巻3にある「感昔二首」詩が後者では同巻4に収められていたり、前者のみ前集巻7に「寄二子」詩を収録したりと、詩の配列や収録詩が一部異なっている。そこで、まず日本にのみ現存する元版(国立歴史民俗博物館所蔵)や五山版(学校法人大阪青山学園所蔵)を目録調査して校勘作業を行い、テキストの原形を比定した。

(2) 『陸放翁詩集』テキストと、陸游の別集『劔南詩稿』テキスト(85巻本及び20巻本残巻)の校勘。現行の校訂本『劔南詩稿校注』(銭仲聯校注、中国古典文学叢書、上海古籍出版社、1985年)はあくまで明・汲古閣版85巻本を底本として校訂しているため、これら元版・五山版の『名公妙選陸放翁詩集』がより古いテキストであるという逆転した立場から校勘を行うことで、陸游詩の読者が受容したテキストがどのような形であったか、新たな見解を提示することができる。

如上の校勘作業を通して、『陸放翁詩集』というテキストの価値、そして『陸放翁詩集』によって展開された陸游詩の受容について

検討を加えた。

4. 研究成果

(1) 『陸放翁詩集』と陸游詩の受容

『陸放翁詩集』の序跋には、15-16世紀を生きた明人によって、全集である『劔南詩稿』85巻本を実見できなかったことが述べられており、明代の陸游詩の受容において『陸放翁詩集』が果たした役割が小さくなかったことを示している。これは、〔学会発表〕で他の研究者の『渭南文集』（陸游の文集）出版についての発表でも指摘されており、国際的・学術的に確認できた事項である。

(2) 『陸放翁詩集』元刊本系統の価値

『劔南詩稿』と『陸放翁詩集』諸テキストを校勘した結果、以下のことが明らかになった。

元刊本と五山版を目睹調査した結果、五山版は元刊本と版式・欠字・異体字の使用状況が一致する翻刻であることを確認した。中国の版本と、その翻刻である五山版が共に現存している例は極めて珍しく、相互にその価値を保証しうる貴重なテキストである。

『劔南詩稿』テキストと『陸放翁詩集』テキストに異同がある場合、元刊本を校勘に用いることで、それが『陸放翁詩集』テキスト固有の異同（元代既に生じていた異同）なのか、明代に入ってから生じた異同なのかを判断することができる。テキストが分岐する過程を知るために、元刊本系統テキストは重要な役割を果たしている。

『劔南詩稿』20巻本（陸游生前の編集・刊行）と『陸放翁詩集』が一致し、『劔南詩稿』85巻本に異同がある場合、これは『劔南詩稿』20巻本から85巻本の間における陸游自身の推敲の痕跡である可能性を有する。さらに、85巻本が明代でもなお入手しづらいテキストであったことに鑑みれば、宋から明にかけて読者が目にした陸游詩の本文とは、『陸放翁詩集』及び『劔南詩稿』20巻本のそれであったであろう。

(3) 所収詩の傾向から見る『陸放翁詩集』の性格

『陸放翁詩集』の刊行には、当然読者の需要が背景にあったはずであるが、この当時、詩語の用例を集めた類書や唐宋詩を中心とした選集、そして先行する詩話を集成した詩話総集が編まれ、出版されている。例えば、『陸放翁詩集』が採用する詩型による分類は『唐詩三体家法』（所謂『三体詩』）が七絶、七律、五律の三詩型を収録するのに類似するし、時代は下るが明代以降日中に跨って流行した『唐詩選』の分類とも重なる。これらの

選集が初学の詩作者を対象とし、営利出版物として刊行されたことから類推すれば、『陸放翁詩集』も同種の性格を有する選集であると言える。

しかし、同時期の選本と『陸放翁詩集』の間には、明らかな差異がある。『唐詩三体家法』が「実接」・「虚接」のように詩句の構成によって分類すること、また方回『瀛奎律髓』が「登覽」・「老寿」・「送別」等、詩作のシチュエーションから分類することから鑑みるに、これらは詩の実作者のためのテキストとすることができよう。それと較べると、『陸放翁詩集』には詩型分類以外には詩作のためのガイドは無く、より鑑賞者向けの選集であると言える。そのように特徴付けられるのはとりわけ後集である。初学者には難度の高い古詩を中心に採録し、詩に対する批評や圈点を添える体裁は、直接的には鑑賞者を対象としたものであると考えるのが自然であろう。

さらに、採録詩型の偏りからもう少し詳細に『陸放翁詩集』が想定していたと思われる読者層について考えてみたい。前集が七言八句を突出して多く収めている点からは、『瀛奎律髓』が想起されよう。『瀛奎律髓』は律詩に特化した選集であるが、詩のテーマごとに分かれた四九の門類という体裁をとる。典故の指摘や訓詁の提示が無いと、同時期の他の選本と較べて上級者向けのテキストとされる。

『陸放翁詩集』は陸游個人の選集であるため、『瀛奎律髓』とまったく同一視することは難しいかもしれないが、少なくとも『陸放翁詩集』も初学者を対象とはしていないだろう。それは、前集が七言八句中心、後集が古詩中心の選であることから窺える。七律に代表される近体詩を前集が担当し、そして後集で古体詩に進んでいく。前集・後集の詩型の偏りは、読者を導くように構成されていると捉えられるのである。

(4) 絶句の改変と詩歌選集

『陸放翁詩集』には、絶句の連作を合成して古詩として収録する例や、それとは反対に八句や十二句の古体詩を四句に分割して収録する例のように、『劔南詩稿』所収の詩型から改変された作品が確認される。

この現象は『陸放翁詩集』が刊行された南宋から元という時代背景を強く反映するものであり、実際、南宋から元にかけて編纂された絶句の選集にも類例が確認できる。既存の作品を切り貼りして新たに一首とする集句詩の流行と併せて考えても、当時の受容者たちにとって、詩の本文は固定的なものではなかったのである。

以上、本研究課題が明らかにしたことを総括すれば、以下のようなになるだろう。元代に編集された陸游詩の選集『陸放翁詩集』は、子孫や私塾の門弟のような極めて限定的な範囲を対象としたテキストであった。これを、

商業出版者が併せて前後集という形式にして出版したものであろう。そして、元々の詩の一部を切り取って絶句のような短詩として収録している例があるように、『陸放翁詩集』元版及び五山版は、14世紀において陸游という士大夫の詩が非士大夫層を含んだであろう読者に受容された、その盛況の一端を表しているのである。

(4) 今後の課題

研究計画では、江戸時代後期の文人・村瀬栲亭による『陸放翁詩集』の増補についても本課題の対象としていた。しかし、これについては、詞を含む502首を『劔南詩稿』と対照し整理する作業を終えているが、成果報告には至っていない。今後、村瀬栲亭本人の詩文の分析等の作業を加えて実施したい。そして、彼が拠ったテキストの比定・選出された詩歌の特徴と傾向の考察・同時期に出版された南宋詩選集との比較を通して、江戸時代後期の文人が南宋詩を積極的に受容した典型例として、日本の漢詩受容史における江戸時代後期の状況についても明らかにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

甲斐 雄一、關於日本所蔵『名公妙選陸放翁詩集』、『紹興文理学院学報(哲学社会科学)』2015年第6期(第35巻)、2015年、pp43-47、査読無(依頼論文)

甲斐 雄一、『名公妙選陸放翁詩集』所収の陸游詩について、『日本宋代文学学会報』第1集、2015年、pp116-136、査読有

甲斐 雄一、『名公妙選陸放翁詩集』について、『中国文学論集』(九州大学中国文学会)第43号、2014年、pp155-164、査読有
<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/recordID/1498249>

[学会発表](計3件)

甲斐 雄一、關於日本所蔵『名公妙選陸放翁詩集』、紀念陸游誕辰 890 周年国際学術研討会、2015年11月20日、紹興飯店、紹興市(中国)

甲斐 雄一、關於『名公妙選陸放翁詩集』、中国宋代文学学会第九届年会暨宋代文学国際学術研討会、2015年9月26日、華北飯店、杭州市(中国)

甲斐 雄一、元代選集所収の陸游詩について、第277回中国文藝座談会、2014年12月20日、九州大学箱崎キャンパス(福岡県福岡市)

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲斐 雄一(KAI Yuichi)
大阪大学・文学研究科・研究員
研究者番号：10637929

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：